

# 考古学からみたエシュヌンナの領域 —エシュヌンナの西方拡大—

小口和美

The Territory of Eshnunna from an Archaeological Perspective :  
“Eshnunna Expansion” into the West

Kazumi OGUCHI

キーワード：エシュヌンナ、メソポタミア、紀元前2千年紀

Key-words : Eshnunna, Mesopotamia, Second millennium B.C.

## はじめに

メソポタミアは古くから北メソポタミア（アッシリア）と南メソポタミア（バビロニア）に分けて語られるが多い<sup>1)</sup>。古代における北メソポタミアと南メソポタミアは政治的には統一されていた時期もあるが、各々独立している時代の方が長く、また文化的にも多少の接触はみられるが分けて考えられる事が多い。この地域の簡単な編年表でも分割して語られるのが普通である。実際に南メソポタミアの栄えた地域の北端と、北メソポタミアやシリアの拠点となる南端の都市（アシュール、マリなど）の間には、緩衝地帯ともいるべき天水農耕にも灌漑農耕にも適さない土地が200kmから300kmの幅で広がっている<sup>2)</sup>。

エシュヌンナの領域<sup>3)</sup>は南メソポタミアの北端にあり（アッカド地方の北部）、交易ルートとして南へはチグリス川の東側でエシュヌンナからデールを経てスーサに抜けるルートを介し、東へはディヤラ川を介し、西のシリアへはユーフラテス川を介し、また北へはチグリス川沿いやハムリン山脈の東側を経るルートを介し周辺地域に行くことのできるメソポタミア内の要衝の地にあたる<sup>4)</sup>。カッシート時代の都ドゥル・クリガルズ（Dur-Kurigalzu）や現在のイラクのバグダードもこのエシュヌンナの地域内に位置しているが、地の利を生かした結果といえよう。これらの交易ルートは既に紀元前3千年紀の中頃には確立されており、その伝統は紀元前2千年紀まで受け継がれていたと考えられる。

筆者はたまたまこのエシュヌンナの領域であるディヤラ川流域のハムリン（Himrin）盆地とエシュヌンナが西に拡大した地域であるユーフラテス川中流域の遺跡で調査に参加した経験から、メソポタミア内におけるこの地域の重要性を痛感している。ここではエシュヌンナが楔形文字資料からどの程度領域を広げていた証拠があるのか、また考古学的な遺物からその西方への領域拡大が証明できるかにつ

いて若干述べてみたいと思う。

エシュヌンナ（現在名：テル・アスマル）とその領域（図1）現在のイラク、バグダードの郊外、テル・アスマル（Tell Asmar）を首都とするエシュヌンナは28人の支配者が300年以上（前2065～前1762年）統治したということがわかっている（Reichel 1996）<sup>5)</sup>。

ウル第3王朝の弱体化によりウルの重要な州都でもあったエシュヌンナは、シュー・イリヤ（Shu-iliya）の治世下（前2026/5年頃）にウルの支配から独立したと考えられる（川崎 2000b: 46）。エシュヌンナの王室はディヤラ川流域のアムルの有力氏族、エラムやデール（Der）などの列強都市との婚姻外交やイシン（Isin）との同盟等で次第に勢力を蓄え、一時にビララマ（Bilalama）の治世の時に自立を失うが（Reichel 1996）、その後、イピク・アダド2世（Ipiq-Adad II）の治世になると南のイシンやラルサが衰え出すのと時を同じくして（前19世紀中～後半）勢力を拡大した。これは領域の拡大ということもあるが、経済的な交易圏の拡大の意味も大きいと考えねばならないだろう。

イピク・アダド2世は「エシュヌンナ（を拡大した）王」の称号を採用。彼以後の支配者も「シャルム」や「全土の王」の王号を使用している。まさにこの時期に領域を支配する中央集権国家体制へと転換がはかられたことが推測される（川崎 2000b: 53-54）。イピク・アダド2世は小ザブ川流域のアラブフム（Arraphum）やディヤラ川上流のメ・テュラン（Me-Turran）なども獲得（Yuhong 1994: 334）し、ディヤラ川流域のすべてを統一した。

続くナラム・シン（Naram-Sin）、ダドウシャ（Dadusha）、イバル・ピ・エル2世（Ibal-pi-El II）の治世には、西のマリや南のバビロン、北のアッシュルと勢力争いを繰り広げた。ナラム・シンはチグリス川流域のカックラトゥム（Kakkulatum）を獲得、ハブル川上流のアシュナックム

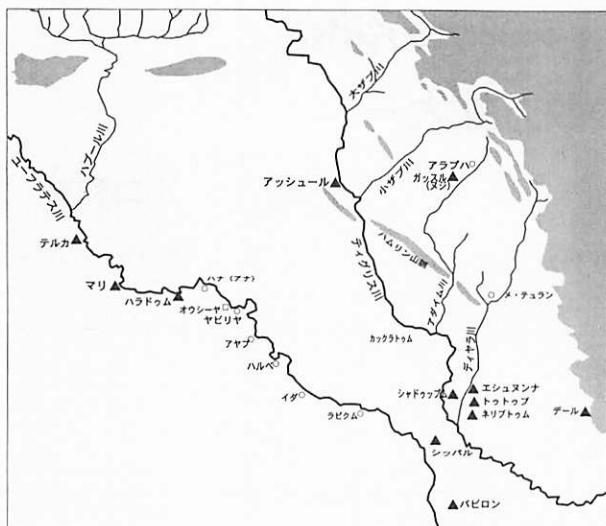


図1 エシュヌンナ関連地図

(Ashnakkum)へも遠征した可能性がある。彼はアッシュルの王で同名の、ナラム・シンと同一の人物であったとする説もあるが、最近の説では否定されている（川崎 2000b: 47; Yuhong 1994: 84, 334)<sup>6)</sup>。その後イピク・アダドの息子であり、ナラム・シンの兄弟であるダドウシャがエシュヌンナの勢力をさらに拡大している。この頃のマリ (Mari) の3つの手紙によると、マリのヤスマフ・アッドウの治世にエシュヌンナの軍隊がユーフラテス川沿いのラピクム (Rapiqum)、マリを攻めたとの記録がある (Yuhong 1994: 334)。またダドウシャはアッシリアと戦い、チグリス川沿いのマンキスム (Mankisum) を獲得している。その後、アッシリアのシャムシ・アダド1世 (Shamushi-Adad I) とその息子イシュメ・ダガーン (Ishme-Dagan) と同盟を結び、2つのザブ川の地域のほとんどを獲得している。しかしこの時は、領土はアッシリアに割譲し、エシュヌンナは戦利品を得たようである（同上: 335）。

その後もアッシリアやマリとは友好関係が続いたようであり、シリアのクアトナ Qatanum にマリのヤスマフ・アッドウ (Yasmah-Addu) が遠征する際に軍隊を派遣しているが、実際にその遠征が成功したかどうかはわからない（同上: 337）。その後イバル・ピ・エル2世 (Ibal-pi-El II) はシャムシ・アダドの死後、マリの下流、スフ地域 (Suhu) のハルベ (Harbe) そしてヤビリーヤ (Yabiliya) の町に遠征している (Yuhong 1994: 337; Beitzel 1984: 36-38)。この地域はまさにエシュヌンナにとって戦略上必要な地域であった。マリ、アッシリア、エシュヌンナの強い同盟関係は無くなり、新たにバビロン (Babylon) が勢力を拡大しはじめる。

「唯一絶対の王はない。10人もしくは15人の王がバビロンの君主ハンムラビに従い、同数がラルサの君主リム・

シンに、エシュヌンナの君主イバル・ピ・エルに、そしてカトナの君主アムト・ピ・エルに従い、また20人の王がヤムハドの君主ヤリム・リムに従う」(Kupper 1980: 10)。

これはイシンの勢力が衰えた時にマリの王ジムリ・リム (Zimri-Lim) の高官が主君に宛てた手紙なので、イシンやマリの名前は出現していないが。当時の状況を見ることができる。シリアで勢力を誇るカトナ (Qatna) やヤムハド (Yamhad)、そして、バビロン、ラルサ、エシュヌンナが同程度の勢力であった事がわかる。

バビロンのハンムラビの治世第29年(前1764年)にエシュヌンナは、エラム、スバルトゥ、グティウム、マルギウムなどの同盟軍と共にハンムラビに破れているが、その次の年、ハンムラビ (Hammurabi) をマリと共に援助し、ラルサを征服している。2年後その同盟も破れ、ハンムラビは前1757年にマリの都市を破壊し、マリを滅亡に追いやった。エシュヌンナは最後までハンムラビにとっては強敵であったが、前1755年に占領される (Roaf 1990: 121)。エシュヌンナが独立を保てたのはこの時までであり、その後はバビロンの領土内に取り入れられてしまった。

上記のようにエシュヌンナの領域はディヤラ川下流域を中心として、最大限ではユーフラテス中流域、チグリス川を遡った地域、ザブ川流域、ディヤラ川上流域を含める事ができる。

### エシュヌンナ領域の考古学的状況

ディヤラ川流域は雨量が少ないため、天水農耕には適さないが、沖積層地域が広がっているため、灌漑が容易にでき、新石器時代の遺跡も多い<sup>7)</sup>。サマッラ文化の南限、ハラフ文化の南限、南のウバイド文化の北限がこの地域内にあり、南北の編年を対応させるのに不可欠な地域である。また伝統的にディヤラ川中、上流地域は東のエラムとの接触があったと考えられ、文化的にも影響を受けている。事実ハムリンダム地域のソンゴル (Songor) 遺跡のウバイド時代の層からイラン高原との接触を証明する赤色磨研土器が出土している (松本 1981: 95-96) 事や、テル・グッバ (Tell Gubba) 第VI層出土の土器に東から搬入したと考えられるものがある (小谷、井 1981: 34, Fig. 12-8)。ディヤラ川流域では初期王朝時代第I期のディヤラ式土器 (スカラレットウェア: Scarlet Ware) で代表されるように、川に沿った独自の文化圏がある。この文化圏はチグリス川の西岸には広がらず、ディヤラ川中流域が北限であり東に広がっている<sup>8)</sup>。

紀元前3千年紀末にテル・アスマルを首都とするエシュヌンナが独立し、その後、ハンムラビに滅ぼされるまでの間の考古学的状況を考えてみると、以下の興味深い点があり、これらは文献で証拠付けられているエシュヌンナの西

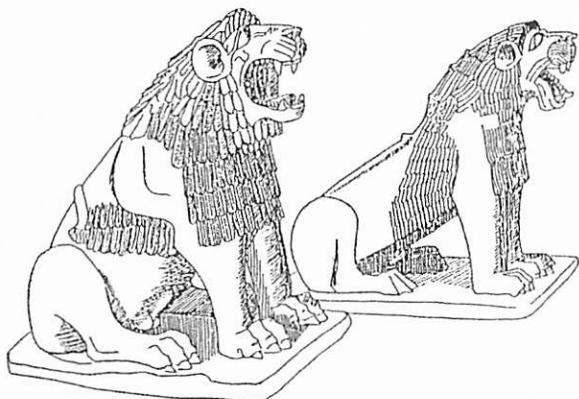


図2 シャドゥップ出土の等身大テラコッタ製ライオン  
(Parrot 1954 : Fig. 6より)

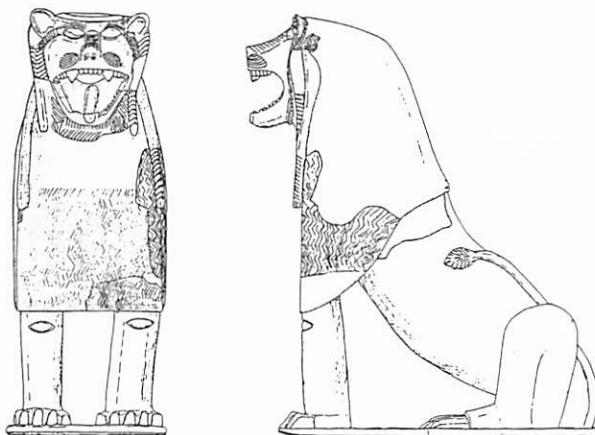


図3 オウシーヤ出土の等身大ライオンテラコッタ像  
(Oguchi 1996 : Pl. 133より)

方への領土拡大の考古学的証拠になるのではないかと筆者は考えている。

#### 1. 等身大テラコッタ製ライオン像の流行および分布

エシュヌンナの重要な都市、シャドゥップム(Shaduppum、現在名テル・ハルマル)で発見されているのと同様の等身大テラコッタ製ライオン像(図2)(Baqir 1946 : Fig. 6)が、トゥトゥブ(Tutub)で2体(Delouguz 1990 : 223, Pls. 59, 60)、さらにユーフラテス川中流域のオウシーヤ('Usiyeh)遺跡で多数(図3)、ハラドゥム(Haradum)(Kepinski-Lecomte 1992 : Figs. 150~153)からも出土している<sup>9)</sup>。これらは神殿の入り口を守護するものであり、宗教的な遺物と考えられるため、その類似性は興味深い。さらにこれらと同類の出土地不明の等身大ライオン像頭部がルーブル博物館に2点(図4)(Parrot 1954 : Pls. 31-1, 2)、とエジンバラのブッレルコレクションに1点(Peltenburg 1991 : 65-67)所蔵されている<sup>10)</sup>。

これらの年代を推定すると、シャドゥップムの例が一番古く、オウシーヤ、ルーブル博物館、ブッレルコレクショ

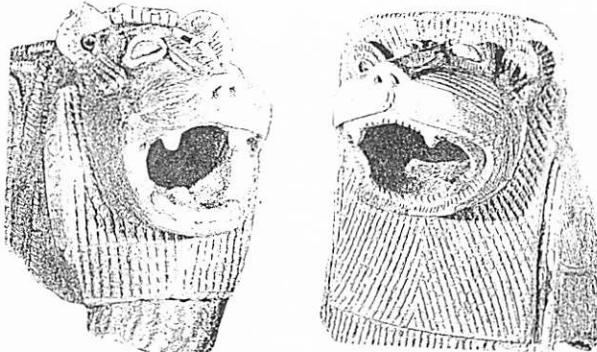


図4 ルーブル博物館所蔵の等身大ライオンテラコッタ頭部(Parrot 1954 : Pl. 31-1, 2より)

ンのものがそれに続き、ハラドゥムのものがさらに新しくなると考えられる(Oguchi 1996 : 191-197)。年代的にはハラドゥムのものが、前1775年から前1650年の間と考えられており、シャドゥップムの例が前1762年以前のものと考えられるので、オウシーヤのものは大きく年代幅をとると前1900年くらいから前1750年くらいのものだと考えられる。またトゥトゥブ出土のライオン像もラルサ時代とされているので、同時期といえよう。

ハラドゥム以西に同類のものが出土したという例は今のことろなく、明らかにこれら等身大テラコッタ製ライオン像は東の影響のものだといえる。もしこれらをエシュヌンナと結びつけることができれば、オウシーヤ出土のテラコッタ製ライオン像はエシュヌンナが拡大し、領土としてこの地域がエシュヌンナによって治められた証拠のひとつとなるのではないかと筆者は考えている。さらに筆者はオウシーヤ遺跡がかつてエシュヌンナのイバル・ピ・エル2世が遠征したことのあるヤビリーヤ(Yabiliya)の町ではないかと考えている。

これらのライオン像をエシュヌンナが勢力を拡大した時期に想定すると、前1850年から前1760年くらいの間と見積もることができる。

#### 2. 白色象眼を施した特異な暗色土器(White-filled Dark Ware)<sup>11)</sup>の流行および分布

図5と類似する特異な白色象眼暗色土器は、イシン・ラルサ時代の限られた時期に流行したと考えられる。分布をみると、エシュヌンナの領域であるテル・アスマルとトゥトゥブ(Delougaz 1952 : Pls. 123-i, 123-k, 124-a, 124-a-e, 125a-c)、ディヤラ川中流域のハムリン地域のテル・ヤルヒ(Tell Yalhi)(Bergamini 1984 : Fig. 65)、テル・ハッサン(Tell Hassann)(Fiorina 1984 : Fig. 23)、テル・スレイマ(Tell Sleima)、テル・ハラワ(Tell Halawa)、テル・ソンゴルB(Tell Songor B)(松本 1981 : Fig. 50-12; Matsumoto and Yokoyama 1989 : Fig. 96-1)から出土

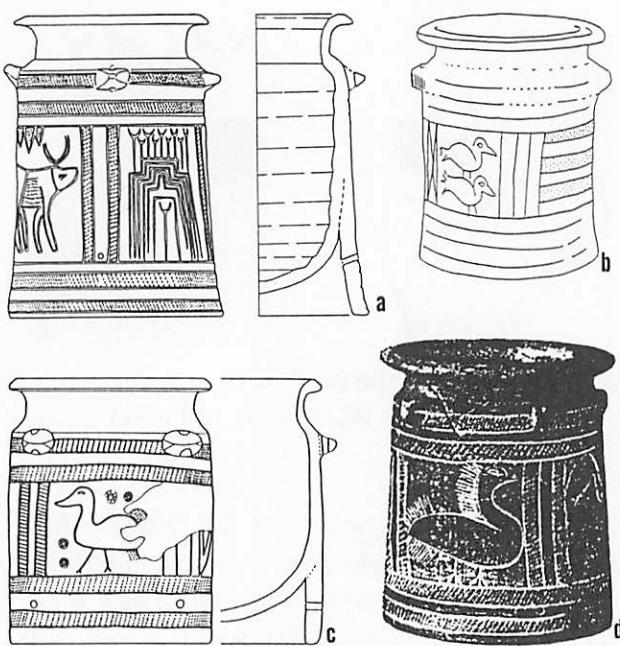


図5 白色象眼を施した暗色土器

- a. オウシーヤ出土 (Oguchi 1996: Pl. 112より)  
 b. ラルサ出土 (Börker-Klän 1970: Tf. 28より)  
 c. ソンゴルB出土 (松本 1981: Fig. 50-12より)  
 d. ギルス出土 (Frankfort 1924: Pl. XIII-2より)

している。南ではニップール (Nippur) (McCown 1967: Pl. 92-12)、アダブ (Adab) (Banks 1912: 181)、ギルス (Girsu) (De Genouillac 1936: 109, Pl. 1110-3, 4, Pl. D; Frankfort 1924: Pl. XIII-2)、ウンマ (Umma)<sup>12)</sup>、ラルサ (Margueron 1967: Fig. 95)、東ではスーサ (Susa) (De Mecquenem 1924: 111, Fig. 3, 231, Fig. 79; De Mecquenem 1934: Pl. XI, Fig. 75-6, 79)、北ではヌジ (Nuzi) (Starr 1937: Pl. 56-I, J, L, M, N, O, P, Q, R, S)<sup>13)</sup> に分布。また西ではオウシーヤに多数の出土例がある。

これらの土器<sup>14)</sup>は形だけではなく文様、胎土、土器製作技術に至るまで類似性があるため、どこか特定の工房で短期間に作られ、輸出されたと考えられる (Börker-Klän 1990: 27)。またこの型式の白色象眼を施した暗色土器の年代は前1840年から前1770年の間とされており (Börker-Klän 1990: 66; Porada 1992: 120)、筆者はこの土器がエシュヌンナ領域内で制作され、エシュヌンナが力を持っている時期にエシュヌンナと関係する地域に輸出された可能性があると考えている<sup>15)</sup>。

実際どの地域で作られたかは特定できないが、筆者は1. 魚を捕らえる鳥等の文様がディヤラ式土器に既に出現 (小谷・井 1981: 図15-3) している事、2. 白色象眼を施した暗色土器が初期王朝時代I期のテル・グッバで出土しており、技術的に伝統があった可能性がある事、3. 土器に文

様を描く伝統が古くからある、4. ディヤラ川流域のイシン・ラルサ時代の遺跡からは、必ずといっていいほど出土例がある、などの点から広範囲に分布するこの型式の土器はディヤラ川流域で製作されたのではないかと考えている。

年代的にも上述の等身大テラコッタ製ライオン像とほぼ同様の時期を示し、まさにエシュヌンナが拡大した時期にあたるため、同様にエシュヌンナが西に領土を拡大していた証拠の一つになるのではないかと考えている。さらに地理的位置から考え、ヌジでの出土もエシュヌンナの北への領域拡大の影響かもしれない。

### 結び

いわゆるイシン・ラルサ時代の後半が、エシュヌンナの勢力拡大の時期である。実際イシンやラルサがエシュヌンナの地域まで領土を拡大したという証拠はなく、またバビロンが本格的に勢力を拡大する時期はハンムラビ以後である。従って、エシュヌンナは紀元前2千年紀の最初の四半世紀に北メソポタミアと南メソポタミアを埋める重要な位置で勢力を延ばしていたのである。

一方、エシュヌンナはこの時期を扱う場合それほど重要視されていない現状がある<sup>16)</sup>。バビロンやマリ、イシン、ラルサの陰に隠れているといつてもよい。というのも交易についていえば、エシュヌンナ自身から発掘された行政経済文書の刊行作業の実体がつかめず、他地域からの間接的な資料に頼っている現状があるからである (川崎 2000a: 16-17)。しかし、エシュヌンナの領域は他地域よりも交易をする上で要衝の位置にあるため、“国際「市場」”的な役割を果たしていた可能性が大きく (川崎 2000a: 25-26)、この地域においての研究で、エシュヌンナはもっと重要視されるべきと考えている。

エシュヌンナの西方への領域拡大は上記の遠征の記録の他、ハナにエシュヌンナの知事がいたことが知られているため、ラピクム、ヒト、ハルベ、アヤブ、ヤビリーヤ、ムルハン、ハナなどのユーフラテス川沿いの町はイバル・ピ・エル2世の支配下にあったと考えられる (Yuhong 1994: 316-317)。さらにハラドゥムまでも一時的にはエシュヌンナの領土であった、もしくはエシュヌンナの影響下で作られた町であった可能性もあるのではないかと筆者は考えている。テラコッタ製ライオン像が出土している上に、非常に整った街並みを持ち、頑強な城壁に囲まれたハラドゥムの町はシャドウップムの町を想起させるからである。

楔形文字資料と文字の書いていない考古学的資料とを結びつけるのは困難である。楔形文字資料には改竄等の理由で、一方だけの情報をもとに歴史を作れないという事情も考慮に入れなければならないし、物は簡単に移動したり、輸入、輸出されたり、模倣されたりするためである。また

考古学的資料をある特定の国、王国に結びつける事はさらに困難である。政治的な領域と文化的な領域が必ずしも一致しない上、民族、宗教等、様々な事柄を考慮しないといけないからである。もし結びつけるとしたら、特殊なものに焦点をあてて検討するしかない。

この論考ではもちろんこれらすべてがクリアーできているわけではなく、様々な問題点があることも承知している。しかし、歴史事象と考古学的な結果を結び付ける事が歴史時代の考古学に携わっているものの使命とも感じている。エシュヌンナの領域拡大を考古学的に示す方法を他にも模索し、多角的に検討していかなければならぬが、ここでは等身大テラコッタ製ライオン像、白色象眼を施した特異な暗色土器がエシュヌンナの西方への領域拡大の一証拠となり得るのではないか？ということを筆者は強くアピールし、筆を置くこととする。

## 註

- 1) 通常南メソポタミアと北メソポタミアの境界線は、ユーフラテス川沿いのヒト(Hit)とチグリス川沿いのサマラ(Samarra)を結んだラインとされている。さらに南メソポタミアは南半をシュメール地方、北半をアッカド地方に分けられる。
- 2) この地帯は調査例が少ないので確かではあるが、遺跡の数も僅かである。むしろチグリス川にはディヤラ川、アダイム川、小ザブ川、大ザブ川などの支流が東から流れ込んでおり、これらはハムリン山脈の東側に広がる豊かな沖積層地域でつながっている。
- 3) ここでいうエシュヌンナの領域とは、まさにテル・アスマルを中心としたエシュヌンナという意味もふまえているが、同時にディヤラ川流域、バグダード周辺地域、および、ユーフラテス川の一部流域まで一時にでも拡大されていたエシュヌンナの漠然とした地域の事を意味する。
- 4) ディヤラ地域の地理と街道については中田一郎氏の研究ノートに言及されている(中田 1999: 43-47)。
- 5) テル・アスマル自体の歴史はさらに初期王朝時代まで遡る事ができ、当時からこの地域の中心的な役割を果たしてきた町である。
- 6) アッシュルのナラム・シンはプズル・アッシュル2世(Puzur-Ashur II)の息子であり、エシュヌンナのナラム・シンとは別人であるとの証拠が印影で発見されており、従来の説(アッシュルのナラム・シンとエシュヌンナのナラム・シンは同一人物)が覆される可能性が大きい(Yuhong 1994: 73)。
- 7) 中田氏の研究ノートにディヤラ流域での各遺跡の調査概略および、資料の情報等がまとめられている(中田 1999: 47-89)。
- 8) ただし、ディヤラ式土器を真似たと考えられる地域色豊かなディヤラ式土器がマリの石積墓300から出土している。
- 9) この時代よりも遡る大型ライオン像としては、銅製のものが、ウバイト遺跡より(Hall and Woolley 1927: 27)、また石製のものが、エリドゥ(Eridu)(Safar et al. 1981: 242, Fig. 120)、ウルク(Uruk)(Boehmer 1991a: 144; Boehmer 1991b: Pl. 261-34, 262)から出土している。またマリではウル第3王朝時代に少なくとも35体の青銅製のライオン像が神殿の入り口に置かれていたことがわかっている(Dalley 1984: 116)。さらにジムリ・リムのある年にダガーン神殿の入り口にライオン像が安置されたとの記録がある(Dossin 1940: 167-168)。さらに、スーサからもウル第3王朝時代のものとされているテラコッタ製ライオン像が出土しており(De Macquenem et al. 1943: Fig. 45)、色彩が施されているなど、オウシーやのものと共通点があり興味深い(Oguchi 1996: 188-200 参照)。またイシンでもシャドウップムと同様の等身大テラコッタ製ライオン像が出土したとされているが(ドゥマンジュ 2000: 122)筆者は未確認である。
- 10) これら3点は同時に競売されたようであるので、出土地は同じと考えられる。パロ(Parrot)は、これらがチグリス川中、上流域の出土であり、バビロニアの出土ではないとしている。さらにフルリ人の特徴をもっていると解釈しているが(Parrot 1954: 8-9)、筆者はむしろバビロニアのものであり、ディヤラ川流域もしくはユーフラテス川中流域出土とするべきではないかと考えている。さらにオウシーや出土のものと細部にいたるまで、類似性がみられるので、オウシーやもしくはその周辺の出土としてもいいのではないかと推測している。
- 11) この土器に対して特定の呼び方はなく、単に刻文土器と呼ばれている場合もある。筆者自身も他の論文では White-filled grey ware としているが、実際に灰色に近いものもあるが、暗茶褐色を示すものもあるため、ここでは白色象眼を施した特異な暗色土器(White-filled Dark Ware)とより実際に近い形の表現とした。
- 12) フランクフォート(Frankfort)による(Frankfort 1924: note 1)。
- 13) ヌジには別系統の白色象眼を施した暗色土器も出土しているが、これらは器形、文様などに差違がみとめられる。
- 14) ハムリン地域の出土例とオウシーやの出土例は、未発表だったため、彼の論文には含められていないが、筆者はまったく同類の土器と考えている。
- 15) この特異な土器が多数出土しているラルサにはこの当時エシュヌンナの在外商館があり、エシュヌンナとラルサは密接な関係にあった(川崎 2000a: 21)ことがわかっている。一方、イシンの調査隊長であったルーダー(Hrouda)博士からの個人的な情報によると、この種類の土器はイシンには出土例がないという。今後の調査でこの種類の土器がイシンから発見される可能性もあるが、これだけ多くの都市に出土しているのにイシンに出土例がないということは何を意味するのか興味深いところである。
- 16) エシュヌンナの交易を扱った文献としてはシッパルの商人が交易の中継地としてエシュヌンナを利用したとのレーマンスの著書があげられる(Leemans 1960: 85-89、川崎 2000a: 17)が、川崎氏も指摘しているように、エシュヌンナに対する研究はまだまだ不十分といわざるを得ない(川崎 2000a: 16-17)。

## 参考文献

- Baqir, T. 1946 Excavations at Tell Harmal II : Tell Harmal, A Preliminary Report. *Sumer* 2: 22-30.
- Baqir, T. 1959 *Tell Harmal*. Baghdad, The Republic of Iraq, Directorate General of Antiquities.
- Banks, E. J. 1912 *Bismya or the Lost City of Adab : A Story of Adventure, of Exploration, and of Excavation among the Ruins of the Oldest of the Buried Cities of Babylonia*. New York and London, The Knickerbocker Press.
- Beitzel, B. J. 1984 Isme-Dagan's Military Actions in the Jezirah : A Geographical Study. *Iraq* 46: 29-42.
- Bergamini, G. 1984 The Excavations in Tell Yelkhi. *Sumer* 40: 224-244.
- Boehmer, R. M. et al. 1991a Die Kleinfunde. In *Uruk Kampagne 35-37, 1981-1984, Die Archologische Oberflächenuntersuchung*

- (Survey), *Ausgrabungen in Uruk-Warka Endberichte*, Band 4 Text (by Uwe Finkbeiner), 131-187. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Boehmer, R. M. et al. 1991b Die Kleinfunde. In *Uruk Kampagne 35-37, 1981-1984, Die Archologische Oberflächenuntersuchung (Survey), Ausgrabungen in Uruk-Warka Endberichte*, Band 4, Tafeln, Taf. 258-265. Beilagen (by Uwe Finkbeiner). Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Börker-Klän, J. 1970 *Untersuchungen zur altelamischen Archäologie*. Berlin, Inaugural Dissertation, (unpublished).
- Dalley, Stephanie 1984 *Mari and Karana, Two Old Babylonian Cities*. London and New York, Longman.
- De Genouillac, H. 1936 *Fouilles de Telloh, Tome II : Époques d'Ur III<sup>e</sup> dynastie et de Larsa*. Paris, Paul Geuthner.
- De Mecquenem, M. R. 1924 Fouilles de Susd (Campagnes 1923-1924). *Revue d'Assirologie et d'Archéologie Orientale* 21-3 : 105-118.
- De Mecquenem, R., G. Contenau, R. Pfister and N. Belaiew 1943 *Archéologie susienne. Mémoires de la mission archéologique en Iran* 29. Mission de susiane, Paris, Presses Universitaires de France.
- Delougaz, P. 1952 *Pottery from the Diyala Region*. The University of Chicago Oriental Institute Publications 63. Chicago, University of Chicago Press.
- Delougaz, P. 1990 Part Two : Khafaiyah Mounds B, C, and D. In T. A. Holland, *Old Babylonian Public Buildings in the Diyala Region*. The University of Chicago Oriental Institute Publications 98, 207-258. Chicago, Oriental Institutne of the University of Chicago.
- Dossin, G. 1940 Inscriptions de Fondation Provenant de Mari. *Syria* 21 : 152-169.
- Fiorina, P. 1984 Excavation at Tell Hassan, Preliminary Report. *Sumer* 40 : 277-289.
- Frankfort, H. 1924 *Studies in Early Pottery of the Near East I : Mesopotamia, Syria, and Egypt and their Earliest Interrelations*. Occasional Papers 6. London, Royal Anthropological Institute.
- Hall, H.R. and C.L. Woolley 1927 *Ur Excavations Vol.I : Al 'Ubaid*. London, Oxford University Press.
- Kupper, J.-R. 1980 Northern Mesopotamia and Syria, In *The Cambridge Ancient History Vol.II Part 1*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Leemans, W.F. 1960 *Foreign Trade in the Old Babylonian Period, As Revealed by Texts from Southern Mesopotamia*. Leiden, E.J. Brill.
- Margueron, J.-C. (translated by H.S. B. Harrison) 1967 *Mesopotamia*. Geneva, Nagel Publishers.
- Matsumoto, K. and S. Yokoyama 1989 Report on the Excavations at Tell Songor B : The Graves. *Al-Rāfidān* 10 : 245-297.
- McCown, D. E. and R.C. Haines 1967 *Nippur I : Temple of Enlil, Scribal Quarter, and Soundings*. The University of Chicago Oriental Institute Publications 78. Chicago, University of Chicago Press.
- Oguchi, K. 1996 *The Middle Euphrates Region in the Early Second Millennium B.C.* Ph.D. thesis submitted to the University of Manchester.
- Parrot, A. 1954 Acquisitions et inédits du Musée du Louvre, 5. -Antiquités (Mésopotamiennes). *Syria* 31 : 1-13.
- Peltenburg, E. 1991 *Western Asiatic Antiquities : The Burrell Collection*. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Porada, E., D.P. Hansen, S. Dunham and S.H. Babcock 1992 The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600 B.C. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd ed. Vol. I, 77-121; Vol. II, 90-118. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Reichel, C. 1996 *Political Change and Cultural Continuity in Eshnunna from the Ur III to the Old Babylonian Period*, Ph. D thesis submitted to the Department of Near Eastern Languages and Civilizations, Oriental Institute Research Archives.
- Roaf, M. 1990 *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. Oxford, Facts On File.
- Safar, F., M. A. Mustafa and S. Lloyd 1981 *Eridu*. Baghdad Republic of Iraq, Ministry of Culture and Information, State Organization of Antiquities and Heritage.
- Starr, R. F. 1937 *Nuzi : Report on the Excavations at Yorgan Tepa Near Kirkuk, Iraq, Vol. 2 : Plates and Plans*. Cambridge and Massachusetts, Harvard University Press.
- Yuhong, W. 1994 *A Political History of Eshnunna, Mari and Assyria, During the Early Old Babylonian Period (From the End of Ur III to the Death of Šamši-Adad)*. Supplement to Journal of Ancient Civilizations No.1. Changchun, Institute of History of Ancient Civilizations, Northeast Normal University.
- 小谷伸男・井博幸 1981 「II : テル・グッバ」藤井秀夫(編)「イラクハムリン調査概報」『ラーフィダーン』2巻 16-49頁。
- 川崎康司 2000a 「古バビロニア期交易における国際市場としてのエシュンナ王国の役割—中継地エシュンナを経由した交易品について—」『オリエント』43巻2号 15-29頁。
- 川崎康司 2000b 「第III章、前二千年紀前半：群雄割拠から再統一へ」『歴史学の現在、古代オリエント』39-70頁 山川出版社。
- ドゥマンジュ, F. 2000 「146 : ライオンの頭部」世田谷美術館、NHK、NHKプロモーション(編)『世界四大文明、メソポタミア文明展』122-123頁 NHK、NHKプロモーション。
- 中田一郎 1999 「ディヤラ地域研究のための覚書」『中央大学文学部紀要、史学科』44号 43-95頁。
- 藤井秀夫・岡田保良・松本健・小口裕通・八木和美・沼本宏俊 1983-1984 「オウシーヤ遺跡A区、B区発掘調査概報」『ラーフィダーン』5-6巻 111-150頁。
- 松本健 1981 「IV : テル・ソンゴールB、C」藤井秀夫(編)「イラクハムリン調査概報」『ラーフィダーン』2巻 75-96頁。

小口和美  
国士館大学イラク古代文化研究所  
Kazumi OGUCHI  
Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University